

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：33939

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17293

研究課題名(和文)一般小中学生における性別違和感の実態把握と心理社会的不適応の関連

研究課題名(英文)The relationship between gender dysphoria and psychosocial maladjustment in elementary and junior high school students

研究代表者

浜田 恵 (HAMADA, Megumi)

名古屋学芸大学・ヒューマンケア学部・講師

研究者番号：00735079

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、子どもの性別違和感についてその実態把握と心理社会的不適応との関連を検討するため、小学校4年生から中学校3年生を対象に質問紙調査を実施した。まず、子どもの性別違和感を測定するための尺度について、12項目からなる尺度を作成した。第二に、性別違和感と心理社会的不適応との関連については、性別違和感が抑うつ・攻撃性に及ぼす影響について、友人関係・教師関係・家族関係・学業ストレス・ソーシャルサポートの不足が媒介することを実証した。第三に、性別違和感の時間的安定性を検討したところ、女子は学年が上がるにつれて相関係数は上昇すること、男子は中程度の相関にとどまることが確認された。

研究成果の概要(英文)：This study conducted the questionnaire study for 4th to 9th students to understand the relationship between gender dysphoria and psychosocial maladjustment in children. First, I developed an original gender dysphoria questionnaire and a factor analysis revealed that 12 items. Second, I examined for the relationship between gender dysphoria and mental health mediated by psychosocial maladjustment: interpersonal relationship, academic stress and lack of social support. Third, I examined the stability of gender dysphoria by two times. The correlation analysis revealed that the stability increased as older in the girls. On the other hand, it kept moderately in the boys.

研究分野：臨床心理学

キーワード：性別違和感 小中学生 心理社会的不適応 抑うつ 攻撃性

1. 研究開始当初の背景

性別違和 (gender dysphoria) とは、DSM-5 (2013) において、DSM-IV-TR の性同一性障害 (gender identity disorder) から変更された診断名である。本邦における性別違和感 (性同一性障害) への臨床医学的対応については日本精神神経学会がまとめた「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」がある。このガイドラインは成人を対象としていたが、第4版 (2012) において初めて、未成年者への対応策として二次性徴を抑制するためのホルモン療法に言及した。その背景には、性別違和感を持つ児童思春期症例が増加し、それに伴い深刻な課題が明らかになりつつあるという現状認識がある (塚田, 2012; 康, 2013; 中山, 2011)。たとえば、岡山大学ジェンダークリニックを受診した329人に振り返り形式で行われた質問紙調査によれば、思春期に不登校と自傷行為を経験した者は約3割、希死念慮を抱いたことのある者は約7割に及んでいた (中塚・江見, 2004)。さらに、対人関係を築くことの難しさをもちやすいことも指摘されている。海外では、Wallien et al. (2010) によって、性別違和感をもつ子どもは、クラスメイトなど仲間から受容されにくく拒否される傾向が強いことが報告されている。日本においては、いじめ被害の問題が指摘されており、性別違和感や同性愛など性に関する悩みをもつ者のうち、子ども時代には男性で7割、女性で5割がいじめ被害の経験があることが示されている (ホワイトトリボンキャンペーン, 2013)。このように、子どもの性別違和感をめぐる問題は国内外において重要な課題として明らかになりつつあり、子どもの性別違和感に関する基盤データの取得が急がれる。

さて、子どもの性別違和感については、必ずしも安定した者ではないという知見が海外から報告されている。つまり、性別違和感を感じている子どもの全員が、性別適合手術等身体治療を求める訳ではないということである。ジェンダークリニックに通院する子どものうち、成人以降に性別違和感が継続する者は12~27%といくつかの研究で言われており、Wallien & Cohen-Ketteniss (2008) は、子どもの性別違和感は16歳以降になると、6割が消失すると報告している。このような性別違和感に関する特徴は、性同一性障害と診断された者を対象とした調査では明らかになりつつあるが、一般児童生徒の中で性別違和感がどの程度存在するのかということや、心理社会的不適応との関連はあるのかということに関しては、国内外を含め、報告はほとんどない。しかし、2010年に文部科学省より、各都道府県教育委員会等に対し、性別違和感をもつ児童生徒への配慮が通知されたことから、一般児童生徒の中にどの程

度性別違和感をもつ生徒が存在するのかということの理解・把握に努め、必要な対応が求められる。本研究は、今まで明らかにされてこなかった、一般児童生徒における性別違和感に関する基盤データの取得、および、心理社会的不適応との関連の検討、さらに、縦断的な調査によって、性別違和感に関する「揺らぎ」について明らかにしていく。

2. 研究の目的

以上より本研究では、一般小中学生における自分の性別に対する違和感の実態および関連する不適応について、質問紙調査による大規模な数量的データを用いて明確にする。

3. 研究の方法

本研究では、質問紙調査による次の3つの研究によって、子供の性別違和感について明らかにする。

研究1：一般群における子どもの性別違和感を調査するための尺度について、信頼性・妥当性を検証する。

研究2：研究1の尺度を用いて、一般児童生徒約6,000人の性別違和感に関する調査を行う。性別違和感の程度、性別違和感に関連する心理社会的不適応や対人関係について調査する。

研究3：研究1の尺度を用いて、縦断調査を実施する。縦断調査により、一般児童生徒における性別違和感の「揺らぎ」や、心理社会的不適応との因果関係を明らかにする

4. 研究成果

(1) 性別違和感尺度の作成

研究1として、小学生および中学生における性別違和感を測定するための尺度を開発し、性別違和感が示す、内在化問題および外在化問題との関連について検討することを目的として調査を行った。小学校4年生から中学校3年生までの5,204名 (男子2,669名、女子2,535名) を対象として質問紙を実施し、独自に作成した性別違和感に関する13項目と、抑うつおよび攻撃性を測定した。因子分析を行った結果、12項目を含む1因子が見出され、十分な内的整合性が得られた。妥当性に関して、保護者評定および教員評定による異性的行動様式と性別違和感との関連では、比較的弱い正の相関が得られたが、男子の本人評定による性別違和感と教員評定の関連には有意差が見られなかった。重回帰分析の結果では、性別違和感と抑うつおよび攻撃性には中程度の正の相関が示された。特に、図1に示されるように、中学生男子において性別違和感が高い場合には、中学生女子・小学生男子・小学生女子と比較して抑うつが高いことが明らかになった。

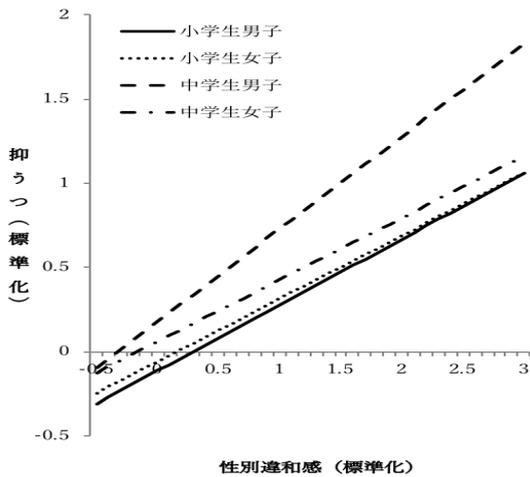
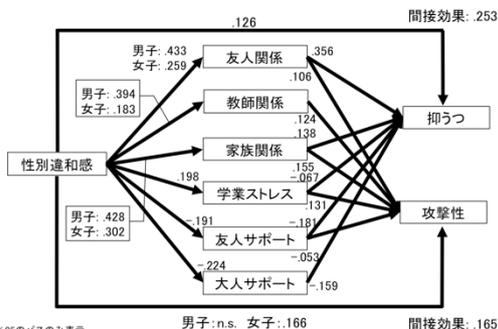


図1 学年段階・性別による性別違和感と抑うつとの回帰直線

(2) 性別違和感と心理社会的不適応

研究2として、性別違和感とメンタルヘルスを媒介する要因として、心理社会的不適応の効果について検討を行った。小学校4年生から中学校3年生までの4,709名(男子2,394名、女子2,315名)に対して、性別違和感・メンタルヘルス・心理社会的不適応に関する質問紙調査を実施した。その結果、性別違和感が抑うつ・攻撃性に及ぼす影響について、友人関係ストレス・教師関係ストレス・家族関係ストレス・学業ストレス(小中学生用社会的不適応尺度;伊藤ら、2014)、およびソーシャルサポート(友人・大人)(小中学生用ソーシャルサポート尺度;村山ら、2016)によって媒介されることが実証された(図2)。友人関係ストレス・教師関係ストレス・家族関係ストレスに関しては、効果量に有意な性差が見出され、女子よりも男子の方が性別違和感によってそれぞれのストレスが強まるという結果が得られた。

共変量:性別、学年、学年の二乗、発達障害特性



p<.05のパスのみ表示
共変量からのパスおよび誤差項は省略
飽和モデルのため、適合度は算出されていない

図2 心理社会的不適応を媒介変数とした性別違和感と抑うつ・攻撃性の関連

(3) 性別違和感の揺らぎ(時間的安定性)

研究3として、性別違和感が縦断的に継続するか否かを確認するため、小学校4年生から中学校3年生に対して3年間継続して実施

した調査のうち、2年以上のデータがある者を対象にして分析を実施した。

1回目調査時点と翌年の2回目調査時点の各変数の相関係数(時点間相関)は、どの学年でも中程度の正の相関(.406~.712)が得られ、学年が上がるにつれて相関係数は高くなる傾向が明らかになった。平均すると抑うつと同程度の安定性であった。その中でも、女子は一貫して上昇し高学年ほど性別違和感が継続することが示唆されたが、男子は比較的一定しない傾向であった。以上より、性別違和感の時間的安定性の程度は男女で異なることが示唆された(表1)。

表1 1回目・2回目調査時点の性別違和感、友人関係ストレス、抑うつの時点間相関(Pearsonの相関係数)

	性別違和感		友人関係	抑うつ
	男子	女子		
小4-小5	.508	.560	.488	.555
小5-小6	.410	.611	.533	.602
小6-中1	.406	.626	.529	.593
中1-中2	.432	.712	.545	.640
中2-中3	.505	.712	.599	.658

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1. 浜田恵・伊藤大幸・片桐正敏・上宮愛・中島俊思・高柳伸哉・村山恭朗・明翫光宜・辻井正次(2016):小中学生における性別違和感と抑うつ・攻撃性の関連. 発達心理学研究, 27(2), 137-147.
2. 浜田恵・伊藤大幸・田中善大・高柳伸哉・片桐正敏・中島俊思・村山恭朗・野田航・辻井正次(2016). 一般小中学生における日常生活習慣と抑うつ傾向の関連. 小児の精神と神経, 56(1), 47-56.

[学会発表](計5件)

1. 浜田恵・伊藤大幸・辻井正次(2017): 一般小中学生における性別違和感の時間的安定性 日本性科学会第37回学術集会 一般演題2-3
2. Hamada M, Ito H, Murayama Y, Nomura K, Tsujii M: Relationships between feeling of gender dysphoria, interpersonal relations and mental health. Congress of Asia-Oceania Federation for Sexology, 31 Mar. - 3 Apr. 2016 Busan, Korea
3. Hamada M, Ito H, Murayama Y, Katagiri M, Uemiya A, Tsujii M (2015): Relationships between neurodevelopmental symptoms and

gender variance in children. 5th World Congress on ADHD, 28-31 May 2015, Glasgow, Scotland

4. Hamada M, Ito H, Murayama Y, Katagiri M, Uemiya A, Tsujii M (2015): Relationships between ASD/ADHD symptoms and abnormal eating behaviors in children. International Meeting for Autism Research, 13-16 May, Salt Lake City, Utah, USA
5. 北村薫・山口悟・丹羽幸司・濱田直之・康純・浜田恵・本村聡・中澤学・南雲吉則 (2015): ガイドラインに準拠した性同一性障害の治療-性別変更手術導入2年目の報告- GID (性同一性障害) 学会第17回研究大会

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浜田 恵 (HAMADA, Megumi)

名古屋学芸大学・ヒューマンケア学部・講師

研究者番号：00735079